

大陸(満州)

従軍回顧談

愛媛県 本窪 充

私は、大正八(一九一九)年十一月十五日松山市畑寺で生まれ、昭和十四年(一九二五)度の徴集、甲種合格でした。

次に私の軍歴の概要をのべます。

昭和十五年

二月二十一日 現役兵として独立工兵第二十二連

隊入営のため広島市内へ集合

二月二十四日 宇品港出発

二月二十八日 大連港上陸関東州通過

三月二十一日 駐屯地龍江省チチハル着。同地は

附近の警備

十二月三日 移駐のためチチハル出発

十二月五日 三江省チャムス着。同地附近の警

備

昭和十六年

一月十日 一等兵

七月十六日 臨時編成(甲)下令

八月二日 編成完結

十二月十八日 中支派遣のためチャムス出発

十二月二十三日 満支国境(山海関)通過。中華

民国安徽省懷遠県懷遠着。同地区

警備

昭和十七年

三月二十八日 帰還のため懷遠出發

三月三十一日 滿支国境（山海関）通過

四月五日 駐屯地チャムス着

五月十二日 チャムス出發

五月十四日 東安省大橋着 同日より国境警備

六月三十日 帰還のため大橋出發

七月二日 駐屯地チャムス帰着

昭和十八年

二月二十日 上等兵

四月十五日 独立工兵第二十一連隊補充隊へ帰

還のためチャムス出發

四月十七日 鮮滿国境（図們）通過

四月二十一日 釜山港出發同月同日下関港上陸

四月二十二日 独立工兵第二十一連隊着隊 東京

の赤羽

四月二十四日 現役兵満期除隊

昭和十五年二月二十一日、私が現役兵として入營し

た時の家族状況は、

父 健在、農業水田三反で日雇い

母 死去

継母 健在、妹一人あるも離別

私は、九州小倉の造幣廠に従事しておりました（昭和十二年より十五年二月まで）。

当時は日支事変もようやく長期化し、日本の青年も兵役に就いて、国家の干城となり出征して戦線に赴くのを男児の本懐とした時節であり、私も郷党の盛大な歓送を受け、感激いっぱい松山を出て指定された広島市へと出發しました。

広島市の宇品の指定旅館へ集まると、満州の部隊から来ていた下士官の指揮を受け、被服廠で帽子、冬服、編上靴等を受領して、今までの私服、私物はすべてまとめて付添いの父に渡しました。帯剣、銃の兵器は一切なしの丸腰で、棧橋から乗船です。父は棧橋で見送ってくれたそうですが、こちらは全員同じ服装をしているので、父は自分の息子が発見できず、困ったとのことでした。大連港からは列車輸送で貨車の中で

石炭のストーブがあり、寒さしのぎになりました。

北上してチチハルに近づくにつれ、激しい寒気のため列車の中で皆は地団駄を踏み、身をこすりあわせて暖をとりました。そのうち、防寒服を支給されて楽になりました。零下数十度の酷寒のため、万事内地の生活とは勝手が違い、まごつきながらの生活でした。一番印象に残ることは、大小便のこと。円錐状の竹の子のように上へ上へと伸びるので、ツルハシで処理しました。所変われば品も変わるのです。

さて、私の工兵隊は渡河専門です。折り畳み舟艇に船外機をつけてエンジンを動かして艇を走らせます。もちろん夏の間のことで、冬は川が凍結するので訓練はできません。夏訓練のため川の水面近くへ行くと、人の背丈ほどの高く伸びた野草の中を行き来するので、当然に蚊や虫が多い。南方戦線と異なり防蚊覆面はない。刺され放しでした。それでもマラリアのような熱病はなくて助かったものです。

満州時代の最も嫌な思い出はビンタでした。夕食

後、手でなく上靴（上履き）で叩かれます。今思ってもゾッとするくらい。なんのための制裁か？ 目的も意味も無かったように思いました。あまりの苦しさ、嫌さのためか冬期夜間に逃亡者が出ました。営舎の外は一面の荒野、凍死があるだけです。結局は舎の近くに隠れているのを捕らえられて営舎とか、お隣の中隊でした。助教、助手、古参兵までおしかりがあった由です。

寒い苦しい冬が去り春が来ると、雪も氷も解けてゆきます。一期の検閲もすみ、駐屯地付近の警備をしながら、部隊の本分である渡河作戦の訓練が日毎、夜毎に、松花江でした。

匪賊・馬賊の横行する満州では、一時の油断もならない。前年の昭和十四年にはノモンハン事変となり、その時の関東軍の輸送トラックは、毎日戦場への往復で大規模な行列が続いたと、参加した古年兵から聞かされました。

十二月三日、東部国境に近いチャムスへ移駐のため

チチハルを出発、五月、チャムス着。付近の警備に就きました。チャムスはおなじ松花江の下流なので河幅は一〇〇メートル以上もあり広い。大規模な実戦さながらの夜間の敵前渡河訓練をする。音と光を一切だしてはならず、人の背丈ほどの草原をかきわけて折り畳み舟を担いで進みます。舟は前後二つに分かれていて前半分六人、後ろ半分六人、エンジン二人で一隻を十四人で水際で運ぶのです。組み立てが終わると全員乗り込んで対岸まで渡る。

担いで行く途中は蚊や虫に攻められ草は茂っている。足元は悪い所あり困難きわまる条件下の訓練でした。

昭和十六年七月十六日、臨時編成(甲)下令。

八月二日編成完結。

十二月十八日、中支派遣のためチャムス出発。チャムス駅から列車輸送である。車両は普通の客車で座席は二人がけ、向かい合って四人掛けるが、車の幅が広いので楽でした。昼は良いが夜は辛い。毎夜腰掛けた

ままで寝ることは難儀で、通路の床へ寝る者もいました。幾日間乗車したか不明ですが、南へ南へと進むので次第に暖かくなりました。内地の気温と同じくらいで楽でした。

十二月二十三日、満支国境(山海関)通過。中華民国安徽省懷遠県懷遠に到着。同地区の警備に就く。川の名は不明ですが川の沿岸に幕舎を張り駐屯しました。中国の川は満州の松花江のようにきれいに澄んでいない。赤土が流れ込んで内地の洪水のような泥水が常時流れている。ここではこの泥水をろ過して炊事に使用しました。

またここでは冬期でも川の凍結はないので、水上訓練がありました。ある日、舟団を組んで大移動をするときの夜間のこと、前方の舟が波を被り沈む事故が起こりました。私は後方について詳しいことは分からなかったが、この事故で曹長一人が行方不明となり、夜が明けて捜索。裸になった死体を発見し、岸辺で火葬にして目的地へ向けて進む。こんな事故死にあうなんて死んだ人も不運、後に残った人もやり切れない。

正月頃、隣の部落へ敵接近との情報が入り、我第二中隊が討伐に出動するも敵はすでに退散して部落は無人であり、第二中隊は戦果もなく引き揚げ帰隊しました。

また、歩哨に就いた経験を述べます。昼は明るくて遠近もよく見える。夜は真暗闇で何も見えず、ただ音だけが頼りとなる。遠くの山の稜線に点々と立つ木を凝視していると、敵の斥候来ると一瞬緊張して錯覚を起こすこともあった。

ある日、戦友の首筋を頭髮に向かって登る虱を発見した。さあ大変。満州では湧かなかった虱がここでは湧くとは不思議千万。全員下着を調べると裏の縫い目に卵が鈴なりに付着して光っているのを見て大いに驚き、釜に湯を沸かし下着を煮沸して退治しました。

三月ともなれば暖かくなり、チャムスの部隊より新しく交換要員が来て、我々は帰隊準備をして三月二十八日出発、三十一日満支国境（山海関）通過、四月五日チャムス着。五月十二日東安省大橋に向けチャムス出発。十四日大橋着。同地区の国境警備に就きました。

た。

この警備と並行して軍用道路の構築で作業は厳しい。大草原を切り開くことは大変で、たくさんの草の根が堅くスコップを踏み込んでも受け付けない。いろいろと工夫するうち誰ともなくスコップにやすりをかけようと決まり、やすりをかけると草の根がよく切れだして成功、作業能率が上がりました。

国境の川には監視船が常に航行していて、気をつけないと拉致されることがあると聞く。ここでは入浴はドラム缶で出入りがなかなかやりづらい。任務を終えて帰りのトラックの上で昼食をとるが副食はない。少しあった砂糖を振りかけて食べた記憶がある。

六月三十日 大橋出発。

七月二日 駐屯地チャムスへ帰着。

チャムスでの生活は、夏は川での訓練、冬は川の氷の採取。氷の厚さは一メートル・五メートル。切り取った後の穴に落ちると命はないので落ちぬよう万全の注意をしました。

また湿地帯に生えた丸く大きくサッカーボールのよ

うに育った草の固まりをヤチ坊主と呼んでいました。そのヤチ坊主をトラックが通れるように何回も爆破して一度に取り除く訓練や、また橋梁爆破なども行いましたが、これはちょっと困難な仕事です。両方の橋のたもとには監視所があり、さとられないようにせねばならぬ。

昭和十八年二月二十日、上等兵に進級。

四月十五日、独立工兵第二十一連隊補充隊へ帰還の

ためチャムス出発。

十七日、鮮満国境（函們）通過。二十一日釜山港出

帆、下関港上陸。

二十二日、独立工兵第二十一連隊着隊。東京の赤

羽。

二十四日、現役兵満期除隊。

私の軍隊生活は以上で終わりましたが、同年兵の中にはその後、召集されて南方のジョホール水道渡河作戦に参加。四カ所同時に渡河を行って、一カ所だけが成功とのことで、この作戦に参加して戦死したのも

多いと聞きました。合掌。

日時は忘れて不明ですが、東部国境調査隊に参加しました。チャムスから列車で虎林、虎頭まで行く。この二つの街は国境の街で、夜ともなればソ連の街の灯が見える。ここよりは馬で全行程を行います。川岸近くへ行けば対岸は岸辺近くまで大木が生い茂り何も見えない。こちらは何もない草原で丸見えです。ここではだいぶ不利と思う。行くうちに友軍の望楼が二〜三キロメートルおきにあるようだ。我等はその中の一カ所で休息をさせてもらいました。一個中隊程いる望楼と、一個小隊くらいの望楼もあるようでした。

この付近は何もない草原で実に寂しい所です。交代は何カ月くらいか？ 我等は何日いたか？ 一週間か十日ばかりのように記憶しています。

終戦を迎え日本も激しく様変わりしました。結婚は昭和二十六年。女、男、男と三人の子供と四人の孫に恵まれ、老夫婦共に健在。平均年齢八〇歳を越える長寿に感謝する毎日を、恩欠の支部長として会員のため若干の御奉公をし、日本の弥栄を念じて、老兵として

平和に真の寄与できる貴重な体験を語り伝えたいと願っています。

私の従軍記録

兵庫県 守本 茂

私は、大正九（一九二〇）年六月十五日、兵庫県養父郡養父町で生まれました。以下に私の軍歴の概要を申し述べます。

昭和十五（一九四〇）年

十二月十日 召集により鳥取中部第四十七部隊第

二機関銃中隊へ入隊

昭和十六年

三月 支那派遣のため宇品港出港

三月十九日 中華民国天津市塘沽港上陸

三月二十二日 河北省石家荘にて歩兵第一四〇連

隊に編入

昭和十七年

五月八日 浙贛作戦参加

九月二十二日 満州移駐のため山海関通過

九月二十五日 間島省延吉到着

昭和十八年

十二月十日 北部第三部隊専属のため鮮満国境通

過

十二月十四日 釜山港出発同日博多上陸

十二月十八日 旭川到着北部第三部隊配属

十二月二十三日 召集解除

昭和二十年

二月十五日 召集により鳥取突一〇一三四部隊歩

兵機関銃中隊へ入隊

八月十五日 神奈川県小田原にて終戦

九月五日 鳥取原隊復帰

九月十五日 召集解除

私が召集時の私の家族の状況は、農業を営む両親に八人兄弟姉妹（私は長男）で合計十人の家族で、私は農業の中心的働き手であり、応召は家族にとり痛手でした。父は以前から覚悟していたようでしたが、母は